

大学生の性に対する態度がデートDVに及ぼす影響

上 野 淳 子・松 並 知 子・青 野 篤 子
赤 澤 淳 子・井ノ崎 敦 子

近年、交際期間におけるパートナー間暴力、すなわちデートDVが注目を集めている。デートDVには、性的関係の深さや、男性に能動性・女性に受動性を求める従来のジェンダー観の影響が指摘されている。本研究では、健全な性的関係を築くためには、性的関係を避けるのではなく、性に対して主体的・肯定的に関わる態度が重要なのではないかと考えた。そこで、①性に対して主体的・肯定的態度を持っていると、パートナーと深く満足度の高い関係を築ける、②性に対して主体的・肯定的態度を持っていると、性的関係の築きやすさにも関わらずデートDVは少ない、という2点を検証するため、大学生を対象とする質問紙調査を行った。結果、①は支持され、②は一部支持された。②について、DV被害・加害に影響する要因は、男性では全く見出されなかった。女性は、性的対人関係能力の高さがパートナーからの性的暴力・交友監視の被害を低めることが示されたが、女性の性的自己管理能力の高さは、腹を立てた際にデートDV加害を行う傾向に結びついていた。よって、女性の性的対人関係能力に関して②は支持され、女性の性的自己管理能力に関しては相反する結果となった。

キーワード：ドメスティック・バイオレンス、デートDV、性的リスク、ジェンダー、性教育

1. 問題と目的

DV (domestic violence) は、主に配偶者間の暴力を指す(事実婚や、離別した元配偶者間も含む)。1990年代以降、DVに対する社会的認識が高まり、2001年に「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」(DV防止法)が施行された。当初、「暴力」とは身体的暴力のみを指していたが、やがて精神的暴力や性的暴力も認知されるようになったため、2004年の同法改正時には、「配偶者からの身体に対する暴力(身体に対する不法な攻撃であって生命又は身体に危害を及ぼすもの)」に加え、「これに準ずる心身に有害な影響を及ぼす言動」も暴力として定義された。しかし、これらの暴力は、婚姻関係ではない親密な関係でも起こりうる。特に、交際期間におけるパートナー間暴力は、将来のDV予備軍でもあり、早期の防止が必要と考えられるようになってきた。デートDV¹⁾とは、このような背景から生まれた言葉であり、交際期間におけるパートナー間の暴力を指す。伊田(2010)は、デートDVを「特に恋愛関係における二者のあいだ(別れた恋人を含む)の支配/被支配関係、虐待状況、主体性の侵害」と定義した。すなわち、デートDVにおける「暴力」もまた、身体的暴力だけではなく、精神的暴力、性的暴力、経済的暴力等を含む包括的なものである。ただし、DV防止法は、同居せず経済的基盤も別個である、交際期間中のパートナー間の暴力は対象外としており、デート

DVへの社会的認識、防止・予防体制は全く不十分である²⁾。

近年の調査により、デートDVの実態が明らかにされつつある。内閣府が2008年に行った「男女間における暴力に関する調査」では、10歳代から20歳代の頃に、身体的暴行・心理的攻撃・性的強要のいずれかを交際相手から受けた者は、女性13.6%、男性4.3%であった（内閣府, 2009）³⁾。伊田（2010）は、デートDVに関連する調査を概観し、デートDVの定義や調査方法にばらつきや問題があるものの、恋愛関係の1割から5割の広範囲に見られるとしている。

デートDVの要因についての研究も行われている。デートDVは性的関係の深さと関連があり、性交渉があるカップルほどデートDVが発生しやすい。日本性教育協会が2005年に行った調査では、「身体的暴力」「いやな性的行為」「無理やりセックス」「つきあいチェック」の被害は、「デートまで」「キスまで」「性交まで」という性的関係の深さに応じて多くなっていた（土田, 2007）。この原因として、性交渉がパートナーの所有・支配を意味すると捉えられていることがあげられる。自分の支配下にある（あるべき）所有物だからこそ、自分の意に沿うことを求め、暴力を用いてまで相手をコントロールしようとするのである。

また、デートDVにおいては男性が被害者、女性が加害者となることもあるが、深刻なデートDVは圧倒的に男性が加害者、女性が被害者であり（伊田, 2010）、特に性的被害はそうである（小泉・吉武, 2008; 内閣府, 2009; 日本性教育協会, 2007; 山田・山田, 2010）。このような女性被害の構造には、性的関係の中で男女に求められる役割が異なることが影響している。性の解放が進み、性意識や性行動のジェンダー差は縮まりつつあるものの、依然として男性に能動性・女性に受動性を求めるダブル・スタンダードが根強く存在するのである（赤澤, 2008; 上野, 2008）。女性は攻撃性と主体性を抑圧されながら育てられ、それが青年期の恋愛における行動パターンを形成する（White et al., 2001）。性交渉を機に、恋愛中のカップル関係は横から縦（男性が上、女性が下）に変化する（村瀬, 2006）。そして、伝統的なジェンダー観は、男性の暴力加害・女性の暴力被害と関連するのである（井ノ崎, 2008; 小泉・吉武, 2008; White et al., 2001）。

では、デートDVを避け、健全な性的関係を築くためには何が必要なのだろうか。リスクを避ける一つの方法として、性的関係から距離を置くことも考えられるが、現実的ではない。むしろ、性に対して主体的・肯定的に関わり、健全な性的関係を築く力が必要とされているのではないか。「健全な性的関係を築く力」については、性教育の立場から議論されている。浅井（2006）は、性教育の3つの方向性として、①性道徳を教え込み性行動の抑制を目指す、②罰則的対応で性行動の抑制を目指す、③現状を踏まえて性的健康と性的自己決定能力の育成を目指す、の3つの立場を指摘している。このうち、①および②の立場は、青少年（特に女性）が性に関わることで自体を遠ざける動きにつながるが、実際に望まない妊娠や性感染症などの性的リスクの対処に有効なのは、③の立場からの性教育である（上野, 2008）。例えば、自らを性的存在として肯定的に捉え、性にオープンな方が、確実性の高い避妊を実行する（Winter, 1988）。また、性的関係への肯定感が高く、自らの性的魅力に自信がある方が、性的リスクへの対処意識も高い（草野, 2006）。しかし、これらの議論は、もっぱら性的リスクを望まない妊娠や性感染症に限定して捉えており、デートDVの視点は欠けている。

そこで本研究では、デートDVに関連する要因として、性に対する態度と、実際のパートナーとの関係性に着目した。本研究の目的は、①性に対する態度と、パートナーとの関係性の様態を明らかにする、②性に対する態度と、パートナーとの関係性が、デートDVの被害・加害に与える影響を明らかにする、の2点である。①については、性に対して主体的・肯定的態度を持っていると、パートナーと深く満足度の高い関係を築けるのではないかと考えた。②については、性に対して主体的・肯定的態度を持っていると、性的関係の築きやすさにも関わらず、むしろデートDV被害・加害は少ないのではないかと考えた。

2. 方法

(1) 調査参加者と手続き

2010年12月から2011年1月にかけ、中国地方、近畿地方、北陸地方の大学・短期大学に所属する学生を対象とした質問紙調査を行った。授業中に質問紙を配布、回収した。

被調査者のうち、回答に不備があった者を除いた535名を以降の分析の対象とした。そのうち、男性は173名(32.3%)、女性は362名(67.7%)であった。年齢の分布は18歳から26歳であり、平均年齢は20.1歳であった。

(2) 調査内容

性的リスク対処意識尺度 性に対する態度の測定には、草野(2006)の性的リスク対処意識尺度(18項目)を用いた。性的リスク対処意識とは、「避妊や性感染症予防など性行動に伴う責任への認知」であり、①性的関係におけるリスクを避けるための適切な行動がとれる自己管理能力の認知、②相手と親密な関係を形成しコミュニケーションをとることのできる性的対人関係能力に関する自信、から成り(草野, 2006)、交際経験、性経験の有無に関わらず回答することができる。「あなたは以下の各項目について、どう思いますか。最も当てはまる番号に○印をつけてください」と教示し、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の4件法で回答を求めた。

異性との交際経験人数 「現在に至るまでの異性との交際人数は何人ですか」と尋ね、「0人」「1人」「2～3人」「4人以上」から選択させた。

以降の質問は、交際人数「0人」以外を選択した者、つまり交際経験がある者のみに回答を求めた。その際、現在交際相手がいる者はその人について、現在交際相手がいない者は「今まで交際してきた人の中で、一番印象に残っている人について」答えるよう指示した。

パートナーとの関係性 交際している／していたパートナーとの関係の満足度および深さについて、それぞれ7件法で回答を求めた。

デートDV被害・加害経験尺度 小泉・吉武(2008)による、デートDV被害・加害経験の有無を問う15項目を用いた。これは、身体的・精神的・性的暴力等を含むデートDVの項目について、被害・加害経験をそれぞれ問うものである。デートDV被害経験については、項目末尾を「～される」とし(ex. 「…殴ったりされる」)、「あなたはこれまでに、次のようなことをその人(交際している／していたパートナー)から受けたことがありますか」と尋ねた(「いつも受けた」「数

回を受けた」「一回を受けた」「受けたことがない」の4件法)。デートDV加害経験については、項目末尾を「～する」とし(ex.「…殴ったりする」)、「あなたはこれまでに、次のようなことをその人(交際している/していたパートナー)に行ったことがありますか」と尋ねた(「いつも行った」「数回行った」「一回行った」「行ったことがない」の4件法)。なお、質問の性質を考慮し、被害・加害経験とも「もし答えたくない場合には回答していただかなくても結構です」と添えた。

3. 結果

(1) デートDV被害・加害経験尺度の分析

交際経験はあるがデートDV被害経験が全くない男性は19名(17.6%)、被害経験が一度でもある男性は89名(82.4%)であった。女性は、被害経験が全くない者は78名(33.8%)、一度でもある者は153名(66.2%)であった。デートDV加害経験が全くない男性は35名(32.4%)、一度でもある男性は73名(67.6%)であり、加害経験が全くない女性は82名(35.7%)、一度でもある女性は148名(64.3%)であった。

以後は、デートDV被害・加害経験尺度を便宜的に間隔尺度として扱うこととした。得点が高いほど被害もしくは加害経験が多いことになる。デートDV被害経験尺度15項目について因子分析(主因子法・varimax回転)を行ったところ、因子負荷量が低かった4項目を省いた11項目について3因子構造を見出した。第1因子は、「腹を立てたとき、身体を掴んだり、叩かれたり、殴ったりされる」「腹を立てたとき、目の前でものを投げつけたり壊したりされる」「腹を立てたとき、大声で怒鳴られる」「腹を立てたとき、殴るフリをされる」から成り、「身体的暴力・脅迫」と命名した。第2因子は、「断っても、無理矢理、キスしたり、身体を触ったり、抱きついたりされる」「断っても、無理矢理セックスされる」「勝手に携帯の着信履歴や交友関係をチェックされる」「コンドームを使用する避妊や性感染症予防に協力してくれない」であり、「性的暴力・交友監視」と名付けた。第3因子は、「腹を立てたとき、長い期間無視される」「腹を立てたとき、すぐに別れ話を持ち出される」「自分の意見や都合に合わないからといって、イライラをぶつけられたり怒ったりされる」であり、「精神的暴力」と命名した。結果をTable1に示した。

デートDV加害経験尺度についても、被害尺度と同様の3因子を適用し、下位尺度化して以降の分析に用いた。

デートDV被害・加害経験の各下位尺度得点について、男女別に平均値を算出し、性差が見られるか検定を行った(Table2)。その結果、デートDV被害「身体的暴力・脅迫」「精神的暴力」で有意差が見られ、男性が女性より高かった。また、デートDV加害経験では、「性的暴力・交友監視」で男性が女性より有意に高かった。

Table1 デート DV 被害経験尺度因子分析結果

	因子 1	因子 2	因子 3
身体的暴力・脅迫 $\alpha=.73$			
・腹を立てたとき、身体を掴んだり、叩かれたり、殴ったりされる	.689	.241	.172
・腹を立てたとき、目の前でものを投げつけたり壊したりされる	.679	.131	.152
・腹を立てたとき、大声で怒鳴られる	.631	.115	.188
・腹を立てたとき、殴るフリをされる	.436	.170	.127
性的暴力・交友監視 $\alpha=.71$			
・断っても、無理矢理、キスしたり、身体を触ったり、抱きついたりされる	.104	.761	.058
・断っても、無理矢理セックスされる	.127	.656	.091
・勝手に携帯の着信履歴や交友関係をチェックされる	.261	.527	.281
・コンドームを使用する避妊や性感染症予防に協力してくれない	.187	.438	.104
精神的暴力 $\alpha=.66$			
・腹を立てたとき、長い期間無視される	.165	.114	.799
・腹を立てたとき、すぐに別れ話を持ち出される	.170	.132	.596
・自分の意見や都合に合わないからといって、イライラをぶつけられたり怒ったりされる	.307	.129	.380

Table2 デート DV 被害・加害経験下位尺度得点と男女差

デート DV	男性 (N=108)	女性 (N=231)	t 値
被害経験	身体的暴力・脅迫 5.34 (2.28)	> 4.62 (1.36)	3.06**
	性的暴力・交友監視 5.02 (2.10)	4.83 (1.65)	0.84
	精神的暴力 4.30 (1.92)	> 3.74 (1.41)	2.67**
加害経験	身体的暴力・脅迫 5.28 (2.51)	4.76 (1.87)	1.91
	性的暴力・交友監視 4.91 (1.96)	> 4.28 (0.85)	3.19**
	精神的暴力 4.09 (1.83)	4.31 (1.96)	-0.99

** $p<.01$ カッコ内は標準偏差

得点範囲：「身体的暴力・脅迫」 4-16 点
「性的暴力・交友監視」 4-16 点
「精神的暴力」 3-12 点

(2) 性的リスク対処意識尺度の分析と性差

性的リスク対処意識尺度18項目について、因子分析（主成分分析・promax回転）を行ったところ、2因子が見出された。第1因子は、「私は好きな人と愛情と信頼をはぐくむ安定した関

係を持つことができる（と思う）」「私は自分で好きな人を見つけて交際することができる（と思う）」など、「相手と親密な関係を形成しコミュニケーションをとることのできる性的対人関係能力に関する自信」（草野, 2006）にあたる10項目から成っていたため、「性的対人関係能力」と命名した。第2因子は、「性やセックスについてまじめに考えたり話したりすることは恥ずかしい（逆転項目）」「私はセックスの場面では相手まかせになってしまう（と思う）（逆転項目）」など、「性的関係におけるリスクを避けるための適切な行動がとれる自己管理能力の認知」（草野, 2006）に関わる8項目から成り、「性的自己管理能力」と命名した。結果をTable3に示した。

Table3 性的リスク対処意識尺度因子分析結果

	因子1	因子2
性的対人関係能力 $\alpha=.83$		
・私は好きな人と愛情と信頼をはぐくむ安定した関係を持つことができる（と思う）	.799	-.033
・私は自分で好きな人を見つけて交際することができる（と思う）	.716	.007
・もし望まない妊娠に至ったとしたら、（自分または相手が）相手と十分話し合うことができる（と思う）	.697	-.042
・性的関係において相手の気持ちや意思を配慮し尊重することができる（と思う）	.686	-.149
・いつ誰と性関係を持つか持たないかを自分の意志で決めることができる（と思う）	.650	-.067
・もし望まない妊娠に至ったら（自分または相手が）、産むにせよ産まないにせよよく考えて責任ある行動をとることができる（と思う）	.646	-.173
・コンドームを正しく使ってエイズや性感染症を予防する安全なセックスを実行できる自信がある	.570	.050
・私は好きな人に素直に自分の気持ちを表現することができる（と思う）	.545	.139
・私は好きな人に自分の魅力をアピールすることができる（と思う）	.473	.129
・性的関係において自分の望むこと、望まないことを相手に伝えオープンに話し合うことができる（と思う）	.388	.337
性的自己管理能力 $\alpha=.69$		
* 性やセックスについてまじめに考えたり話したりすることは恥ずかしい	-.097	.684
* 私は自分の性行動について深く考えたことがない	-.109	.640
* 私はセックスの場面では相手まかせになってしまう（と思う）*	-.100	.584
* 望まない妊娠や性感染症（クラミジアや淋病等）などのトラブルが起これたらどう対処していいかわからない（と思う）	-.062	.559
* 私は自分の性や体に関わる健康のことについてあまり深く考えたことがない	-.046	.506
* セックスの相手と避妊やエイズ・性感染症の予防について話し合うことは難しい（と思う）	.127	.499
* 自分が傷つきたくないのも、恋愛や性的な関係に入るのを避けてしまう（と思う）	.214	.458
・私は望まない妊娠やエイズ・性感染症などのリスクから身を守るために情報を収集したり相談したりすることができる（と思う）	.302	.347

* 逆転項目

草野（2006）では、上の2因子を想定して尺度を作成したものの1因子構造が見出されたが、本研究では本来の2因子構造となった。なお、2因子間には $r=.51$ ($p<.001$) の中程度の相関があった。

性的対人関係能力と性的自己管理能力に性差があるか、 t 検定を行った。その結果、性的対人関係能力には有意差は見られなかった（男性 $M=28.65$, $SD=5.16$; 女性 $M=28.86$, $SD=4.93$; $t(532)=-0.44$, n.s.）。しかし、性的自己管理能力は男性が女性より有意に高かった（男性 $M=22.28$, $SD=3.83$; 女性 $M=21.49$, $SD=3.94$; $t(532)=2.19$, $p<.05$ ）。

(3) 性的リスク対処意識と交際経験人数

異性と交際した経験がない者は196名（36.6%；男性65名, 女性131名）であった。それ以外の339名は異性との交際経験があり、交際経験人数「1人」は91名（17.0%；男性31名, 女性60名）、「2～3人」は154名（28.8%；男性44名, 女性110名）、「4人以上」は94名（17.6%；男性33名, 女性61名）であった。交際経験人数に性差は見られなかった（ $\chi^2(3)=1.51$, n.s.）。

交際経験人数によって性的対人関係能力・性的自己管理能力に違いが見られるか、男女別に一元配置分散分析・多重比較（DunnettのT3）を行った。結果、男女とも、交際経験人数が増えるほど、性的対人関係能力・性的自己管理能力が高くなる傾向が見られた（Table4）。

Table4 性的リスク対処意識と交際経験人数の一元配置分散分析・多重比較結果

		0人	1人	2～3人	4人以上	F値	多重比較結果 (DunnettのT3)
男 性	性的 対人関係能力	27.00 (5.39)	27.35 (3.89)	30.18 (4.44)	31.09 (5.26)	7.37***	0人, 1人 < 2～3人, 4人以上
	性的 自己管理能力	20.83 (2.87)	22.29 (3.86)	22.84 (4.05)	24.43 (4.15)	7.58***	0人 < 2～3人, 4人以上
女 性	性的 対人関係能力	26.55 (3.86)	29.85 (5.36)	30.07 (4.98)	30.59 (4.70)	17.05***	0人 < 1人, 2～3人, 4人以上
	性的 自己管理能力	19.63 (3.35)	21.62 (3.90)	22.39 (3.95)	23.72 (3.42)	21.32***	0人 < 1人, 2～3人, 4人以上 1人 < 4人以上

*** $p<.001$ カッコ内は標準偏差

得点範囲：「性的対人関係能力」10-40点

「性的自己管理能力」8-32点

(4) 性的リスク対処意識とパートナーとの関係性

交際している／していたパートナーとの関係の満足度に性差は見られなかった（男性 $M=5.11$, $SD=1.56$; 女性 $M=5.13$, $SD=1.66$; $t(337)=-0.08$, n.s.）。パートナーとの関係の深さについても同様に性差はなかった（男性 $M=4.95$, $SD=1.71$; 女性 $M=5.07$, $SD=1.60$; $t(337)=-0.61$, n.s.）。

性的対人関係能力・性的自己管理能力とパートナーとの関係性について、男女別にPearsonの相関係数を算出したところ、いずれも低～中程度の正の相関があった（Table5）。

Table5 性的リスク対処意識とパートナーとの関係性の相関

	男性		女性	
	性的対人関係能力	性的自己管理能力	性的対人関係能力	性的自己管理能力
関係の満足度	.28**	.23*	.41***	.36***
関係の深さ	.28**	.29**	.51***	.42***

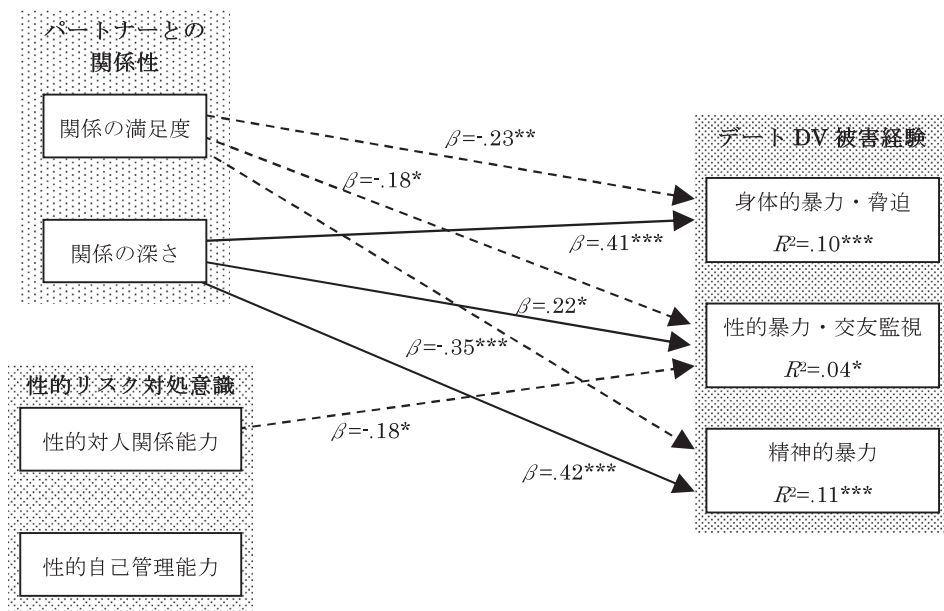
* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

(5) 性的リスク対処意識とパートナーとの関係性が、デートDV被害・加害経験に及ぼす影響

デートDVの被害・加害経験に影響する要因を検討した。性的対人関係能力、性的自己管理能力、関係の満足度、関係の深さを独立変数とし、デートDV被害・加害経験の下位尺度得点それぞれを従属変数とする重回帰分析を行った。

男性では、デートDV被害・加害経験とも、重決定係数が有意ではなく、デートDVに関連する変数を見出すことはできなかった（被害「身体的暴力・脅迫」 $R^2=.05$, n.s.; 被害「性的暴力・交友監視」 $R^2=.06$, n.s.; 被害「精神的暴力」 $R^2=.05$, n.s.; 加害「身体的暴力・脅迫」 $R^2=.02$, n.s.; 加害「性的暴力・交友監視」 $R^2=.06$, n.s.; 加害「精神的暴力」 $R^2=.06$, n.s.）。

一方、女性ではデートDV被害・加害経験とも有意なパスが見られた。女性のデートDV被害経験の分析結果をまとめたものがFigure1である。「関係の満足度」からは、全てのデートDV被害経験への負のパスが見られ、関係に不満なほど被害を受けやすかった。「関係の深さ」も全ての被害経験へ影響しており、関係が深くなると被害に遭いやすい傾向が示された。性的リスク対処意識のうち、「性的対人関係能力」からはデートDV被害「性的暴力・交友監視」への負のパスが見られたが、「性的自己管理能力」からのパスは見られなかった。

Figure1 女性のデートDV被害経験重回帰分析結果 (* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$)

女性のデートDV加害経験の重回帰分析結果は、Figure2に示した。「関係の満足度」からは、デートDV加害「身体的暴力・脅迫」「精神的暴力」に負のパスが見られた。パートナーとの関係に満足していなければ、デートDV加害を行う傾向が示された。「関係の深さ」は、デートDV加害「身体的暴力・脅迫」「精神的暴力」に影響を与えており、関係が深くなるほどデートDVの加害を行いやすいことが示された。性的リスク対処意識の「性的対人関係能力」はいずれのデートDV加害にも影響していなかったが、「性的自己管理能力」からデートDV加害「身体的暴力・脅迫」「精神的暴力」に正のパスが見られた。すなわち、性的自己管理能力が高い女性ほど、デートDVの加害者となる傾向があった。

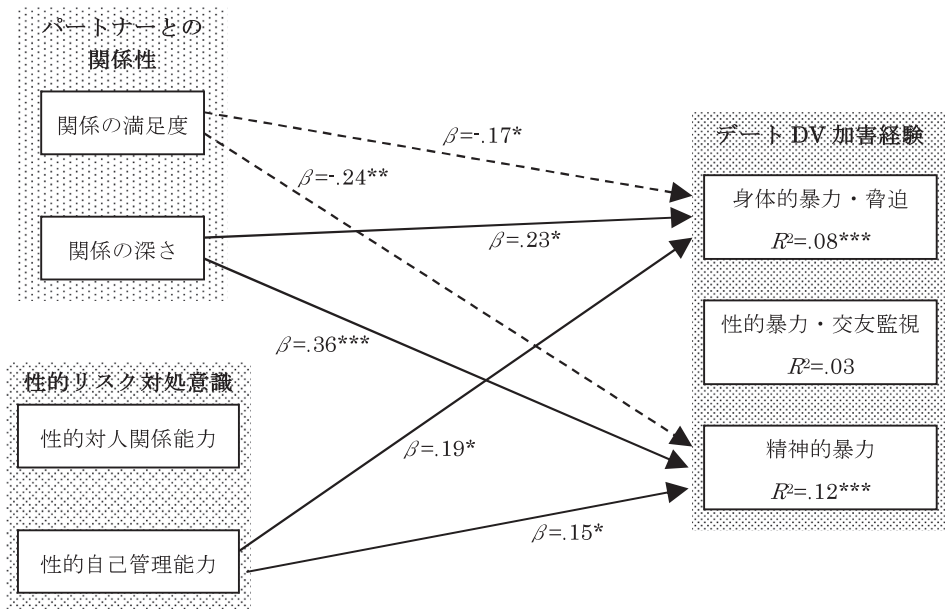


Figure2 女性のデートDV加害経験重回帰分析結果 (* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$)

4. 考察

デートDV被害・加害経験尺度の分析からは、異性との交際を経験した多くの者がデートDVに該当する行動を経験していたが、平均値は概して低く、全体としてデートDVの頻度は高くなかった。また、性的暴力・交友監視は男性の加害経験が多かったが、身体的暴力・脅迫、精神的暴力の被害経験も男性のほうが多く、デートDVは男女双方が加害者にも被害者にもなりうる構図が改めて示された。

性的自己管理能力は男性が高かったことから、やはり女性が性行動において受動的な現状が明らかとなった。性的対人関係能力に性差はなかったため、交際時のコミュニケーション全般では女性も自己表現できることがわかった。しかし、性的自己管理能力が表すような性交への積極的な関わりという点では、従来指摘されている女性への抑圧が存在するのであろう。健全で満足いく性的関係を築くためには、性に主体的に関わっていく態度が重要とされているが、

未だ女性にとってはそれが困難な状況なのである（上野, 2008）。

性的リスク対処意識と交際経験人数およびパートナーとの関係性を検討した結果から、性的対人関係能力・性的自己管理能力が高い者は、男性・女性とも、交際経験が豊富で、満足した深い関係を構築している傾向があることが示された。これは、性に対して主体的・肯定的態度を持っていると、パートナーと深く満足度の高い関係を築ける、という当初の予想に合致した結果であった。同様の結果は草野（2006）でも得られており、性交経験がある者の方が、ない者に比べ、性的関係への肯定感、自己の性的魅力への満足感、性的リスク対処意識が高いことが示されている。なお、交際経験を積むことで、性的対人関係能力・性的自己管理能力が高まるとも考えられ、相互に作用しあう関係と予想される。

デートDV被害・加害経験に影響する要因を検討したところ、男性のデートDVと関連する変数は見出せなかった。男性におけるデートDVは、女性とは異なるメカニズムが関わっていることを示唆する結果である。男性のデートDVと関連する変数を見出すのは今後の課題である。一方、女性では、満足度の高い関係はデートDVを防ぐ傾向があり、また、従来の研究で指摘されてきた通り（土田, 2007）、関係が深くなるとデートDVが起りやすい傾向が示された。性的リスク対処意識のうち、性的対人関係能力の高さは、性的暴力・交友監視の被害を低める傾向が見られた。しかしながら、性的自己管理能力は、身体的暴力・脅迫および精神的暴力の加害をむしろ高める傾向が見られた。よって、性に対して主体的・肯定的な態度を持っていると、性的関係を築きやすいが、デートDVは少ないのではないかとこの当初の予想は、性的対人関係能力に関しては支持されたが、性的自己管理能力にはあてはまらず、それどころか相反する結果となった。

なぜ性的自己管理能力の高さはデートDVの加害と関連したのだろうか。本研究で使用了尺度の身体的暴力・脅迫および精神的暴力を構成する項目は、ほぼ全てが「腹を立てたとき～」から始まっている。つまり、立腹した際に行われるデートDVである。それに対し、性的暴力・交友監視は、主に普段の行動に関するデートDVである。性的自己管理能力は、前者の腹を立てたときの行動にのみ関連していた。このことから、性的自己管理能力が高い女性は、そうでない女性に比べ、交際経験が豊富であるが故に、喧嘩や別れなど、デートDVが起りやすい場面に遭遇しやすかったのではないかと考えられる。また、性的自己管理能力が高いということは、性的関係における主張性・積極性を備えているということであるが、それ故に、腹を立てた際には行き過ぎ、デートDV加害に該当する行動をとりやすいのではないとも考えられる。それに対し、性的対人関係能力が高い女性は、パートナーとお互い意思を十分表現し尊重できるため、交際経験は豊富だが、望まない性行為を拒否でき、自分の自由な行動を制限されることもない性的関係を構築できる傾向が高いと言えよう。なお、性的対人関係能力が高いとデートDV被害を防ぐ一方、デートDVに結びつきやすい深い関係とも関連し、また性的自己管理能力が高いと、デートDVに結びつきにくいパートナーとの関係の満足度と関連する一方デートDV加害を高める、など一見矛盾する結果が得られたが、デートDVに影響する要因は複合的なため、関連する他変数の影響を排除すると個々の変数がデートDVとそれぞれ独自の方向性で結びつくのであろう。

性的自己管理能力の高さが、腹を立てたときのデートDV加害へ結びつく傾向からは、性への主体的態度が、必ずしも相手との健全なコミュニケーションに結びつかない場合もあることが示された。したがって、性教育においては、性の主体性とリスクへの対処能力を育むと同時に、恋愛中のコミュニケーションとデートDVを学び、加えて、怒りの感情への対処など具体的なスキルを身につけることが必要であろう。

今後の課題としては、まず、男性のデートDV被害・加害をもたらす要因の解明が挙げられる。既に述べたように、深刻なデートDVは男性加害者、女性被害者の構図が一般的であるが、本研究の結果もそうであったように、デートDV全般では男性が被害者、女性が加害者となることもある（小泉・吉武, 2008; 松野・秋山, 2009; White et al., 2001; 山田・山田, 2010）。従来は、女性のデートDV被害を念頭に研究が行われてきたため、男性のデートDV、特に男性被害のメカニズムを説明できるモデルは別個のものとして再考すべきなのかもしれない。もちろん、パートナー間の暴力は異性間のみに限らず、同性カップルも考慮した研究が必要である（Lochhart & White 1994; Waterman et al., 1989）。また、女性に関しても、本研究で見出された重決定係数はいずれも低かった。今後は、例えば一人暮らしかどうかなど生活環境等も考慮し、より説明力の高いモデルを構築していくことが必要である（Frieze, 2005）。次に、今回の研究では、デートDVが生じたのがいつであるかという時間軸を考慮していない。パートナーとの関係の満足度・深さや、性的対人関係能力・性的自己管理能力は、デートDVの結果である可能性もあり、そのような相互性を考慮して今後の研究を進めていくべきであろう。最後に、そもそも何をデートDV被害・加害と見なすかについての議論を深め、デートDVへの認識と実情を汲み取れる測定法を精査する必要性が挙げられる。今回のデートDV被害・加害経験尺度は、行動のみに焦点をあてたものであり、行動の頻度が高いとデートDVであると判断される。しかし、デートDVの認識は個人によってかなり異なり、行為の軽重と頻度、文脈によっては、グレーゾーンとなる（伊田, 2010）。つまり、行動のみに目を向けるのは不足があり、関係性における支配の程度や恐怖心等も考慮して、デートDVかどうか判断することが必要なのである。そして効果的な防止・予防教育へつなげていくことが求められる。

あとがき

本研究は仁愛大学共同研究費助成を受けて行われた。調査の実施とデートDV被害・加害経験尺度の分析は共同で行い、それ以外の分析と執筆は第一著者が行った。本研究の一部は、第22回発達心理学会ラウンドテーブル（2011年3月25日、於東京学芸大学）および日本心理学会ジェンダー研究会公開研究集会「デートDVの加害及び被害の要因分析」（2011年3月25日、於仁愛大学）において発表された。

注

- 1) 英語ではdating violenceであり、日本でも未だ様々な呼称が見られる。しかし、「デートDV」が最も定着しつつあるため、本研究でも「デートDV」の呼称を用いる。

- 2) 「デートDV」の呼称は、DV防止法の適用を受けるという誤解を与えやすいため再考すべき、という主張もある(富安・鈴木, 2008)。
- 3) なお、女性しか調査されていないが、これまでに異性から無理やり性交された経験がある者(全体の7.3%)のうち、加害者が「よく知っている人」は61.8%であった。ただし、加害者が(過去にも現在にも婚姻関係のない)交際相手かどうかは、この調査からはわからない。

引用文献

- 赤澤淳子 2008 恋愛とジェンダー 青野篤子・赤澤淳子・松並知子(編) ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版, 112-130
- 浅井春夫 2006 子どもの性的発達と性教育の課題 浅井春夫・子安 潤・鶴田敦子・山田 綾・吉田和子 ジェンダー／セクシュアリティの教育を創る～バッシングを超える知の経験 明石書店, 147-183
- Frieze, I.H. 2005 Hurting the one you love: Violence in relationships. Belmont, CA: Thomson Wadsworth.
- 伊田広行 2010 デートDVと恋愛 大月書店
- 井ノ崎敦子 2008 女性に対する暴力 青野篤子・赤澤淳子・松並知子(編) ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版, 231-248
- 小泉奈央・吉武久美子 2008 青年期男女におけるデートDVに関する認識についての調査 純心現代福祉研究, 12, 61-75
- 草野いづみ 2006 大学生の性的自己意識、性的リスク対処意識と性交経験との関係 青年心理学研究, 18, 41-50
- Lochhart, L. L. & White, B. W. 1994 Letting out the secret: Violence in lesbian relationships. Journal of Interpersonal Violence, 9, 469-492
- 松野 真・秋山 胖 2009 若年層における特定異性間の暴力(dating violence)に関する研究～大学生を対象としたdating violenceに関する意識・実態について 生活科学研究, 31, 117-128
- 村瀬幸治 2006 恋人とつくる明日 十月舎
- 内閣府 2009 男女間における暴力に関する調査
- 富安俊子・鈴木江三子 2008 ドメスティック・バイオレンスとデートDVの相違および支援体制の課題 川崎医療福祉学会誌, 18, 65-74
- 土田陽子 2007 青少年の性的被害と恋人からのDV被害の現状と特徴 日本性教育協会(編)「若者の性」白書～第6回青少年の性行動全国調査報告 小学館, 121-144
- 上野淳子 2008 セクシュアリティ 青野篤子・赤澤淳子・松並知子(編) ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版, 149-166
- Waterman, C. K., Dawson, L. J., & Bologna, M. J. 1989 Sexual coercion in gay and lesbian relationships: Predictors and implications for support services. Journal of Sex Research, 26, 118-124
- White, J. W., Donat, P. L. N., & Bondurant, B. 2001 A developmental examination of violence against girls and women. In R. K. Unger (Ed.), Handbook of the psychology of women and gender. New York: John Wiley & Sons. (尾田貴子(訳) 2004 女の子および女性に対する暴力の発達の検討 森永康子・青野篤子・福富 護(監訳) 女性とジェンダーの心理学ハンドブック 北大路書房, 406-421)
- Winter, L. 1988 The role of sexual self-concept in the use of contraceptives. Family Planning perspectives, 20, 123-127
- 山田典子・山田真司 2010 高校生のDating violenceの特性と課題 母性衛生, 51, 311-319